

台北市東部地域

片倉 佳史

台湾の首位都市として君臨する台北市。人口は260万をほこっており、名実ともに台湾の中枢となっている都市である。その台北の歴史をたどる旅。今回は中正紀念堂を中心に台北市東部の歴史を辿ってみたい。

国立台湾大学医学院附設医院旧館

今回は前回紙幅の関係から紹介できなかった旧台湾総督府台北医院を最初に取り上げてみたい。ここは台湾最大の病院建築であると同時に、最大の医療研究機関でもあった。台湾の医療史を語る上で、欠かせない存在の建物である。

この建物は中山南路の西側に面している。正面玄関は常德街という路地に面しているが、中山南路を走っていると、赤煉瓦の重厚な建物が延々と続いている。現在は中山南路の東側に国立台湾大学医学院の付属医院が竣工しており、こちらは旧館という扱いになっている。

この建物の竣工は1916(大正5)年。1919年に竣工した台湾総督府とほぼ同時期の建築物である。赤煉瓦造りのどっしりとした建物で、台湾総督府や専売局と並び、台北を代表する建築として広く名を馳せていた。1921年には伝染病棟が完成している。総敷地面積は2万3900坪。建坪1万7200坪という規模を誇っていた。

台北には赤煉瓦の官庁建築がいくつか残っているが、いずれも南国の強い日射しを受け、輝いているように見える。そして、ビンロウ樹や大王椰子といった熱帯性植物は日本本土では見られず、建築士たちも、南国の植物を建物に重ね合わせることに熱心だったのではないかと思えてくる。

建物の前に立ってみると、赤煉瓦の外壁に白石を帯状に配したデザインが美しい。これはこれまでも何度か述べてきた「辰野式」のスタイルで、

この時代の台湾によく見られたものである。

設計を担当したのは台湾総督府技師の近藤十郎だった。近藤は東京帝国大学建築学科を卒業後、1906年に台湾へ渡ってきた技師である。この建物以外にも西門町の八角堂(現西門紅樓)や台湾日日新報社(現存せず)、基隆郵便局(現存せず)、台北第一中学校(現建国中学)などを手がけているが、ここは彼の代表作とされることが少なくない。1920年には台湾総督府の営繕課長となり、私立成淵学校の校長を兼任したが、1924年に官職を辞し、東京へ戻っている。



現在は国立台湾大学医学院附設医院を名乗っている。当初は木造建築だったが、1913年に改築工事が始まった。1936年に台北帝国大学の付属病院となった。

東洋随一の規模を誇った病院建築

正面玄関を入ると、大ホールがあった。当初は右手に事務室があり、左手に薬局があった。このホールは大ききこそ、それほどではないが、やは

り圧倒されるものがある。二階部には回廊があり、ここにも立ち入ることができる。

1937（昭和12）年の資料によると、台湾総督府台北医院には内科、外科、眼科、小児科、産婦人科、耳鼻科、皮膚科、歯科、理学治療科があった。病床は一等、二等、三等に分かれており、それぞれ、25、50、308となっており、合計383となっていた。一等病室の定員は1名で、二等は2名だった。三等は不定（通常時は4名）とされていたが、収容人数を確保するために大部屋が設けられ、定員は6～8名、最大で18のベッドが置かれることもあったようである。

この病院は設備、スタッフともに高いレベルを誇り、それは東洋随一とも称されていた。実際に館内を歩いてみると、思いのほか広い。建物の配置は独特なもので、中央通路を背骨に喩えると、病棟が左右対称に肋骨のように並んでいる。竣工時は動物の骨格を模しているようだと評されたという。

この配置は風通しと日当たりをよくするための工夫であるという。建物は東西にのびており、各棟病室の南面にはベランダが設けられていた。さらに、基礎土台は1メートルほど高くなっている。つまり、建物全体が中二階のような状態になっており、正面玄関も一度、石段を上った場所にある。これもまた、湿度を嫌ったためのものである。



台湾最大の規模を誇った病院建築。「一度に500人分の食膳を用意できる」といううたい文句が存在する大型病院だった。中央ホールの様子。

熱帯病理学の権威

ここは病院としての機能だけでなく、研究機関としても知られていた。特に熱帯病理学については世界的な権威となっていた。1874年の台湾出兵（牡丹社事件）によって、日本人は初めて熱帯病の恐ろしさを知り、1895年に台湾を領有した当初も澎湖島に派遣された部隊がマラリアの大発生に苦しめられるなど、大きな痛手を被っていた。

日本統治時代が始まった後も、衛生状態は極度に悪く、上下水道設備もなく、人々の衛生意識も完全に欠如していた。そういった中、この地の風土に慣れない日本人は抵抗力がないこともあり、あらゆる病魔に苦しめられた。

そういった背景もあり、台湾総督府はマラリアやコレラといった疫病の対策に全力をあげた。そして、この建物は医療研究の中核と位置付けられていた。

1898（明治31）年に台湾総督府民生局長（後に民政長官と改名）に着任した後藤新平は、自身が医師であり、内務省衛生局長を歴任していたが、そういった手腕を発揮することが期待されていたのは言うまでもあるまい。

後藤はまず「公医」の制度を採用した。これは新設された医学校の卒業生が実地で活躍し、衛生事情が安定するまでの期間、本土から医師を呼び寄せるものだった。そして、人々に衛生意識を植えつけ、同時に医療技術者の養成を進めた。

そして、1899（明治32）年には医学校が設立される。ここは医師養成を主軸に起きながらも、同時に風土病の防疫を中心とした医学研究の場であった。その後、日本統治時代は敗戦によって終わりを告げたが、戦後を迎えた後もここは熱帯病理学の権威として君臨し続けた。

戦後は国立台湾大学の附属病院となり、1991年に中山南路を挟んだ場所に新館が完成したことで、主役の地位はこちらに譲っている。しかし、

この建物の風格は今も全く色褪せていない。台湾医学界の重鎮として、存在感を見せつけている。内部の参観も自由にできるので、ぜひ一度は訪れたい場所である。



赤煉瓦の壁面。ここは現在も台湾で指折りの規模を誇る病院である。随所に増築と改修の跡が見えるが、ほぼ往年の姿を留めている。MRT（新交通システム）の駅に近く、交通はとても便利だ。

中国北方式のスタイルに変えられた東門

総統府（旧台湾総督府）の前をのびる凱達格蘭大道を進んでいくと、突き当たりに旧台北城の城門である東門があり、そこから北側に仁愛路、南側に信義路がのびている。その付け根の部分にはエバーグリーン（長栄）グループが運営する張榮發基金會のビルがある。

会議場や海事博物館なども併設されているこの建物だが、もともとは中国国民党の中央党部（本部）があった。2006年3月に張榮發基金會が23億円で購入し、話題となった。日本統治時代には日本赤十字会の庁舎があった場所である。

東門についても触れておきたい。これまでも触れてきたように、清国統治時代の台北は周囲を城壁に囲まれていた。そして、東西南北に小南門を加えた計五箇所の城門があった。

東門は正式には景福門を名乗り、1879年に創建されたが、日本統治時代に都市計画によって城壁は撤去された。そして、戦後を迎え、中華民国政府は「観光整備」という名目の下、この城門に改築を施した。1966年にこの工事は終わったが、原

型は保たれず、中国北方の宮殿様式のものとなってしまい、上部には国民党の党徽が据え付けられてしまった。

こういった歴史建築の私物化というケースは戦後の台湾では全島にわたって見られた。この党徽については、1982年、当時は台北市議会議員だった陳水扁らによって指摘された。そして、それから20年もの歳月を経て、2009年6月12日、「歴史的建造物は本来あるべき元来の姿を基準とする」という台北市文化局の決定により、ようやく党徽は消された。

日本統治時代に発行された古絵はがきを見ると、当初の東門は二層となっており、屋根は中国南方のスタイルである曲線を多用したものだ。そして、戦闘に備え、分厚い石組みとなっているほか、随所に銃眼が施されていた。大きさは34坪程度のものだった。

余談ながら、こういった南方式、北方式の宮殿様式の建造物を見ていると、戦後に台湾へやってきた外省人勢力の「特権ぶり」を感じることがができる。台湾各地で見られる古刹・名刹の類はほぼ例外なく南方式だが、戦後に創建された故宫博物院や国父紀念館、圓山大飯店、そして、台南の延平郡王祠などのように、戦後に改築を受けたものは圧倒的に北方式が多い。



総統府に向かい合う位置にある東門。台北という都市の歩みを自らに刻み込んだ歴史の証人である。張榮發基金會のビルから総統府方面を眺めた様子。

蒋介石の偉業を称える中正紀念堂

台北市の中心部に位置するこの空間は、台湾が歩んできた道のりと台湾社会が抱く現状を如実に物語る場所である。

日本統治時代の地図を見ると、この辺りは旭町と呼ばれていた。終戦まで、ここには日本軍の山砲隊と歩兵第一連隊があった。言うまでもなく、市内最大の規模を誇っていた軍用地だが、終戦後、国民党に接収されて党財産となり、その場所に中正紀念堂が建てられた。

現在、敷地全体は中正公園と呼ばれ、その敷地面積は8万2600坪となっている。その奥にあるのが蒋介石を記念した中正紀念堂である。青い屋根と白い壁が印象的な建物で、広大な広場を従えているためか、その存在感は大きい。

「中正」とは正門にも記された「大中至正」に由来する蒋介石の本名である。ここは1975年に死去した蒋介石の「偉業」をたたえる名目で造営され、1976年10月31日、蒋介石の誕生日に合わせて工事が始まった。そして、1980年4月4日に全工事が終了。翌日から一般公開となった。

台湾における孫文と蒋介石の存在について、触れておきたい。まず、孫文は国民党政府によって中華民国の国父として神格化された人物である。しかし、孫文の生涯は台湾との接点が多かったわけではない。そのため、中華民国に思い入れのある外省人はともかく、本省人と呼ばれる台湾土着の人々が孫文に対して抱くイメージというのは往々にして薄い。戦後、国民党政府によって敷かれた教育体制の下、国父として孫文を崇めることを強要されたが、印象としては、ある程度の距離感があるように思える。実際、孫文の名を知らない台湾人はいないが、その人物像や生涯について、深い知識を持つ人は多くない。

一方、蒋介石については、戒嚴令の時代を知る世代であれば、省籍を問わず、無縁でいることは

できなかった。恐怖政治を敷いて、社会を制してきた人物だけに、人々が抱く印象は複雑と言わざるを得ない。ここでは詳述しないが、台湾の戦後史を知る上で、避けては通れない命題であることは確かだ。



台北市内の中心部に広大な敷地を誇る中正紀念堂。蒋介石の偉業を称える名目で設けられた。現在は中国人旅行者が激増している。

外省人、そして中国人と中正紀念堂

周知のように、蒋介石率いる国民党政府は共産党との闘いに敗れ、政府機能を台湾に移してきた。そして、国際社会において、中華人民共和国政府が中国の代表政府となった後も、中華民国は台湾に亡命した状態で国体を維持してきた。外省人、特に第一世代の人々の意識は今も「中国人」であり、故郷である中国大陸に戻る夢を捨てていない。当然、台湾という土地に対しての思い入れは深くない。

しかし、時代とともに、「大陸反攻」の夢が現実性を失っていったのは明白で、そのために政府は国家に忠実な人材を育て上げる必要があった。つまり、台湾の人々に「中国（＝中華民国）」意識を植え付け、政府の主張に見合った国民に仕立て上げるべく教育を施したのである。そして、諸外国に対しても、「中華民国」という実体を視覚的にアピールする必要があった。ここ中正紀念堂は、そういった思惑が結実した現場だった。

その後も中正紀念堂を取り囲む環境は大きく変

化した。特に李登輝総統の時代に急速に進められた民主化により、独裁者と特定政党への忠誠を示す空間は、年々浮いた存在となっていった。実際に、中正紀念堂は中華民国への独善的愛国主義者と外省人第一世代の精神的支柱であるという批判は公然と出されていた。

もともと、中正紀念堂は市内最大の公共空間であり、各種イベントが実施されることが多かった。しかし、戒厳令が解除されると、学生運動やストライキの集会が開かれるようになり、特に民主進歩党が政権を担った2000年から2008年の間は、それまで国民党政府が弾圧を加えてきた台湾独立・建国派の集会までもが行なわれるようになった。

名称についても問いかけが行なわれた。独裁者の名称を冠した呼称は民主国家にふさわしくないとして、「台湾民主紀念堂」や「総統紀念堂」といった名に改めようという意見が出された。これについては2007年に一度、「台湾民主紀念館」と改名されたものの、強大な勢力を誇る旧政権の反対に遭い、また、各選挙で民進党が連敗していたこともあって、2009年7月20日に中正紀念堂の名が復活するという一幕があった。

そして、2008年7月18日、中国人観光客の受け入れが解禁されたことで、中正紀念堂はさらに新たな局面を迎えた。蒋介石を記念して設けられたこの空間は、中国からの観光客で溢れかえるようになったのである。もちろん、その真意は畏敬や尊敬、支持といったものとは全く無縁であり、あくまでも観光スポットとして扱われているが、あふれかえる中国人旅行者の姿と、蒋介石や国民党の党徽などをモチーフにしたグッズが飛ぶように売られている様子を見ていると、隔世の感は否めない。変わりゆく時代の中、中正紀念堂の存在は常に微妙な動きを見せている。

曹洞宗大本山台北別院鐘樓

先述した東門から仁愛路を進んでいくと、林森

南路との交差点にちょっとした広場がある。オフィスビルの前庭のような場所だが、そこに古めかしい鐘樓が残っている。日本統治時代に曹洞宗の布教所として設けられた寺院の跡地である。

1895(明治28)年、台湾は日本の統治下に入ったが、間もなくして、日本の仏教団体は各宗派とも、熱心な布教活動を開始している。ここもそういった中の一つで、正式名称は曹洞宗大本山台北別院を名乗った。寺院の設立は1908(明治41)年、翌々年の5月28日に入仏式が挙行されている。

比較的早期に設けられたこともあって、曹洞宗の信徒は多かったという。1923年に寺院は改築され、1930年には台湾人信徒のために、後述する観音禪堂が設けられた。設計は入江善太郎という人物が担った。入江は東京工業学校教員養成所を出て1904(明治37)年に台北庁技師となり、1912年に台湾総督府の技師となっている。本堂の完成を見ることなく入江は台湾を去り、明治神宮の嘱託技師となり、さらに後、朝鮮へ渡っている。

なお、この寺院は学校も経営していた。1916年に寺院付属の学校が設けられ、僧侶や信徒の子弟への宗教教育が行なわれた。これは1935年に「私立台北中学校」と改名され、一般の教育機関となった。この学校は通称「ほんちゅう梵中」と呼ばれて親しまれていた。現在、この学校は台北郊外の士林に移転しているが、私立泰北中学として残っている。

終戦を迎えると、寺院は変容を強いられた。日本人は台湾を去り、寺院は国民党政府によって東和禪寺と名付けられた。しかし、敷地は中国大陸からやってきた下級兵士や貧民に占拠され、無秩序な状態が続くこととなる、本堂は戦後もしばらくは残っていたが、火災によって焼失。現在、その場所には台北市政府(市役所)教育部の青少年センターが建っており、かつての様子を偲ぶことはできない。

そんな中、かろうじて往年の姿を留めているのがこの鐘樓である。1930年に竣工したもので、近

寄ってみると、石組みの基礎部分は堅固な造りである。鐘楼が正門となっているという構造は珍しく、下部が石造りで、上部がコンクリート造りという構造についても特筆されていた。

現在、周囲は高層ビルが林立し、渋滞が慢性化した幹線道路からは絶えることなく自動車の走行音が聞こえてくる。現在、台北市はこの鐘楼をモニュメントの扱いにして、周囲を整備している。古蹟にも指定され、行政によって管理されることが決まっている。一度はうち捨てられ、放置されていた鐘楼だが、今や再び息を吹き返したかのようである。



基座は石組みで堅固な造りとなっている。周囲には真新しい日本式の石灯籠が並べられている。



鐘楼全景。鐘楼が山門を兼ねるという設計は珍しかったという。なお、隣接する泰北中学は日本統治時代からの仏教系私立学校で、この寺院が運営する教育機関であった。



林森南路と仁愛路の交差点に位置している。現在、寺院の痕跡を示しているのはこの鐘楼以外には残っていない。

寺院の伝統を受け継ぐ観音禅堂

曹洞宗の台湾別院は、名目上は台北に暮らす日本人信徒のために開かれた。この寺院は永平寺派に属し、当初から日本本土からやってきた住民のための寺院という意味合いが強かった。

この観音禅堂は1914（大正3）年に開かれている。現存する本堂は3年後に竣工したもので、古さは感じないものの、すでに90年以上の歳月を経ている。ここは台湾人信徒のために設けられ、同時に台湾人僧侶の修行の場となっていた。本堂も日本式ではなく、赤煉瓦を用いた三合院建築となっているのが興味深い。堂内正面には大本山永平寺の第67代住職だった北野元峰禅師の筆による「萬徳圓滿」の扁額が今も掲げられている。

戦後は別院とともに東和禅寺を名乗るようになった。別院の本堂は国民党政府に接収され、敷地も中国から逃げ延びてきた人々に占拠されていたため、観音禅堂が寺院としての正統を受け継ぐことになった。

別院本堂の跡地は1993年1月に「台北市青少年育楽中心」の建設が決まり、鐘楼を除いて撤去されたが、こちらは改造こそされているものの、往時の姿を留めている。現在、境内には壁に埋め込まれた石碑のほか、地藏尊が残る。台座には世話人

となった人々の氏名が記されているが、その大半は日本人のものである。表情はとても穏やかで、静かに台北の歴史を眺めているかのようである。



戦後は東和禅寺を名乗るようになった観音禅堂。本堂には九重葛が覆うように繁茂している。



境内には日本統治時代に設けられた地藏尊が残っている。信仰の対象として手厚く守られている。台座には世話人として日本人信徒の名が刻まれている。

市長官邸藝文沙龍

ここは終戦まで台北州知事の公邸だった。閑静な環境にあり、敷地には鬱蒼と緑が生い茂っている。遠目に見ると、緑の中に木造家屋が潜んでいるかのような眺めである。

800坪におよぶ敷地を誇るこの建物は、当時の高級官舎によく見られた和洋折衷の造りである。全体の雰囲気は日本風で、落ち着いた印象を与えている。館内は畳敷きの部屋はもちろんあったが、間取りは洋風となっていて、家具などもすべて舶来物で統一されていたという。

この建物が竣工したのは1935（昭和10）年のことだった。建坪は152坪となっており、邸宅とし

ては当時最大級の広さとなっていた。戦時体制下であったこともふまえると、これほどの規模はやはり珍しいと言わざるを得ない。当時の官舎は職位階級によって造りが定められていたが、それはここにも受け継がれていた。

敷地内に植えられた植物にも注目したい。ここには亜熱帯性の常緑樹が植えられており、濃い緑が木造家屋のたたずまいを際立たせている。裏庭も広く、池などもあったようである。

終戦を迎えた後、ここは台北市長の公邸として使用されていた。しかし、ここ数年間は放置状態となっており、荒れ果てていたという。しかし、2000年11月に台北市がこれを整備し、芸術サロンとすることを決定。市民に開放された。現在は公共スペースとなっており、講演会や展覧会などが行なわれている。館内では詩集や画集、文芸作



かつての市長公邸は芸術サロンと変わった。館内は昭和時代によく見られた和洋折衷の造りである。



各種イベントのほか、展示会や講演会なども催されている。落ち着いた雰囲気のカフェも好評だ。喫茶スペースの様子。豊かに生い茂った緑を眺められる屋外席もある。

品などの販売コーナーもあって好評だ。散策の途中に立ち寄ってみたい休憩スポットである。

国立台湾大学法律学院・社会科学院

ここは総督府が管轄する高等専門学校であった。正式には台湾総督府台北高等商業学校を名乗り、開校以来、経済界に優秀な人材を送り込んできた学校である。創設は1919（大正8）年4月。一部の校舎はその時に竣工したものである。第一回の入学式は同年の6月に実施されている。

ここは台湾最初の旧制専門学校であった。校名は終戦直前の1944年に台北経済専門学校となっている。戦後は旧台北帝国大学の文政学部がここに移され、1947年1月には国立台湾大学に吸収合併されて、同学の法学院となった。

日本統治時代の台湾には、この学校のほか、台北帝国大学や旧制台北高等学校、そして各地の旧制中学などの高等教育機関があったが、いずれも台湾に居住する日本人子弟のために設けられた教育機関である。この学校の場合、台北帝国大学に比べるとやや台湾人学生の割合が高かったが、やはり台湾人の入学には厳然たる制限があった。

ここを訪れると、まずはどっしりとした校門が目に入ってくる。門柱は重々しい雰囲気を漂わせており、一見で戦前のものとわかる。この門柱は台湾産の石材が用いられており、上には銅製の燈器が据え付けられている。

正門脇には木造の守衛室も残っている。日本統治時代の守衛室が今も使用されているのは珍しく、しかも木造建築となると、ここ以外では旧台北帝国大学裏手の通用門くらいしか残っていない。小さな建物なので、見落としがちだが、訪問の際はぜひとも目を向けてみたいものである。

石組みの門柱を抜け、構内に入ると、正面に池があり、その奥に校舎が見える。この池は大きく、周囲と合わせると、ちょっとした公園のようである。ここに立って周囲を見まわすと、全体的にゆ

とりのある配置で校舎が並んでいるのがわかる。

構内の建物はいずれも煉瓦造りの2階建てである。これらの建物は1922（大正11）年に竣工したものである。すでに90年という歳月を経ている。柱にはギリシャ風の装飾が施され、欧風のたたずまいを感じさせている。若干の違和感を禁じ得ないのは、屋根に黒瓦が用いられているためだろうか。こういった建物は国立台湾大学（旧台北帝国大学）の校舎の一部などでも見られるが、いずれも独特な印象を放っている。

こういった瓦屋根をいなく西洋建築は、台湾では大正時代から昭和初期の大型建築にだけ見られる。現在、職人不在の時代を迎え、瓦屋根の保全は困難を極めていられると言われるが、この場合、保存状態は良好だ。教室や廊下、階段なども学校らしい雰囲気が漂っている。



赤煉瓦に黒瓦という組み合わせの建築は、台湾では大正時代に入ってから見られるようになったものである。



構内は広く、学生数も多くないためか、落ち着いた情緒が漂っている。講堂の様子。



木造の守衛室は今も使用されている。戦前からの守衛室が残っているのは珍しい。

椰子の根元に埋まった石碑

この学校の構内に忘れ去られた小さな遺構が残っている。「第十二回卒業生記念」という文字が刻まれた日本統治時代の石碑である。大きさにして60センチほどのもので、目立つものではない。

台湾でも卒業生が母校にこういった石碑を寄贈することはよく見られた。裏面には「昭和八年三月建立」と刻まれているので、この年の卒業生が贈ったものと考えていいだろう。「三月」より下の文字は、土に埋もれている。手で土を払ってみたが、そこに刻まれた文字を探ることはできなかった。

先にも述べたように、この学校の卒業生は大半が日本人である。日本が台湾の領有権を放棄した後、この地は台湾住民ではなく、中華民国の国民党政府に委ねられた。学校も台湾人ではなく、国民党政府によって運営され、日本人が建てた石碑は遺棄された。日本人にゆかりのある石碑の多くが撤去されたことを考えれば、原型を保っているだけ幸運なのかもしれない。しかし、ここに通っている学生や教職員は、やはりこの石碑の存在を知らない。

傷つけられなくとも、忘れ去られるという痛切な侘びしさは残る。石碑については記録が見あたらず、当時の卒業生を探しだそうにも、高齢ゆえ、

非常に難しい。こういった調査は年を経るたびに難しくなっていく現実を思い知らされる。



知られることもなく忘れ去られた遺物。構内の片隅に眠っている卒業生寄贈の石碑には侘びしさが漂っていた。

旧日本郵船株式会社台北支店長宅

東門からまっすぐ東へのびる仁愛路を進んでいく。この道路は大王椰子の並木が整備されており、美しい。日本統治時代の都市計画で企画され、戦後、1958年6月に全通している。道幅が最大で100メートルと、台北で最も太い道路としても知られている。

この家屋は日本統治時代に旭町と呼ばれた地区にある。日本統治時代の末期に建てられたもので、すでに70年近い歴史がある。敷地は広いが、手入れの行き届いた緑で覆われ、庭園らしい雰囲気漂う。往来の激しい仁愛路からは想像すらできない閑静な空間である。

私は縁あって、家主である杜萬全氏（故人）を訪ね、この建物を撮影させてもらうことができた。門を入ると、大きな木造家屋が横たわっている。補修は施されているが、原型はしっかりと留めており、日本でも珍しくなった優雅な和風建築の雰囲気が漂う。別棟となった離れ家も保存状態が良く、木造家屋特有の建築美を誇っている。

この建物は戦時中、日本郵船株式会社によって造営され、台北支店長の邸宅として使用されてい

た。日本郵船は海運会社として、台湾と日本本土を結ぶ重要な機能を持っていた。その支店長宅ということもあり、造りの良さが際立っている。まさに、物資供給に制限があった時代のものとは思えない建物である。

終戦後、この建物は国民党政府に接収されたが後に売却され、杜萬全氏が受け継いだ。老家屋ではあるが、大切に扱われることで、建物はよりいっそうの落ち着きを放ち、美しさが増したように思えてならない。愛され続けることで、建築物は風格を増していくことを教えられる建物である。



手入れの行き届いた庭園。日本式の石灯籠が今も存在感を際だたせている。



広い敷地の中に木造家屋が横たわる。戦時中に建てられたものとは思えない優雅な造りである。建物は「L」字型になっており、屋内のどこからでも庭の緑を愛でることができるようになっている。



母屋へ垂直に接する離れ家も保存状態は良好だ。ここに暮らす住人の心遣いが伝わってくるような空間である。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは30冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も行なっている。著書に『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『観光コースでない台湾』(高文研)、『台湾に残る日本鉄道遺産』(交通新聞社新書)など。編著に台北生活情報誌『悠遊台湾』がある。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』(玉山社)などの著作がある。今年5月には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』(宝島社)を手がけた。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>